

## 1

## 赤木家の人々とその蔵書

清水 信子

二松學舎大学文学部／北里大学東洋医学総合研究所医史学研究部

赤木家は、16世紀末より現在まで十三代続く医家である。初代与左衛門重宗は、天正10年(1582)の備中高松城の戦いに毛利勢として参陣した武士であったが、高松城落城後は武士をやめ、賀陽郡八田部村、のちの浅尾藩蒔田領市場村にて医を業とした。以降、赤木家は代々侍医、藩医として医業に従事し、大正15年(1926)、十二代元蔵の時代に倉敷に移り、現当主の十三代制二氏にいたる。

代々の蔵書は制二氏により整理、管理され現存316点。医書類が約半数の164点を占め、大別すれば漢方115点{①漢籍、及びその邦人注釈書29点 ②邦人著作・講義筆記86点}、蘭方・洋方21点、近代医学28点となる。医書以外の資料については、その半数強の80点が漢籍、日本漢学、漢詩文、また字書類などの漢学関係で、その他、歴史地理類、理学数学類などである。これらの所蔵経緯、各代の旧蔵者については、蔵書印、書き入れ、書写識語などから特定できるものも少なくなく、それによれば江戸中期から明治期にかかる六代簡(享保9<1724>~寛政3<1791>)から十代鼎(天保2<1831>~明治32<1899>)との関係が窺知される。そこで本発表では、赤木家所蔵資料について、医書を中心として簡以降各代の修学状況を追いつつ各旧蔵書、その蔵書傾向、特徴について概観する。

六代簡とその二男で七代凌(宝暦2<1752>~文化10<1813>)はともに讃岐大野原に遊学し、丸亀藩医尾池恭庵(?~明和8<1771>)の医学塾寿世館に学び、簡は帰郷後、浅尾藩蒔田家の侍医となる。凌は明和6年から8年(1769~71)頃と安永6年(1778)頃の二度にわたり遊学し、恭庵とその養子で丸亀藩医の薫陵(享保18<1733>~天明4<1784>)に学び、恭庵の『恥齋暇録』や『傷寒論』講義聞書、薫陵の『素靈八十一難正語』『経穴摘要附図』をはじめ寿世館で書写した資料が散見する。それらの中には恭庵の師後藤良山(1659~1733)の『師説筆記』写本や良山の子椿庵の著書、また良山に学んだ香川修徳の『一本堂行余医言』などの書写もあり、尾池父子を通して後藤流を学んでいることが知られる。

八代立(天明3<1783>~文政5<1822>)になると京都に遊学し、文化4年(1807)から同6年まで吉益南涯(1750~1813)に学んでいる。立旧蔵書には南涯の晩成堂で書写した南涯の『方庸』『観証辨疑』や、同時期に書写したと思われる南涯父東洞の『業徴』、また遊学時に購入した『新編金匱要略方論』、書入した『傷寒論』があり、立の修学状況が反映されたものとなっている。

九代辨(享和元<1801>~文久2<1862>)は、笠岡西大島村の医家原田恭庵の四男として生まれ、赤木家には婿養子として入った。備中松山藩藩校有終館にて西山復軒(1761~1840)に学んでいるが、医学修学については明らかではなく、また辨に関わる資料としては華岡青洲『瘍科方笈』写本の他は不明である。

十代鼎(天保2<1831>~明治32<1899>)は、有終館学頭をつとめた山田方谷(1805~1877)の私塾牛麓舎に学び、後に津藩有造館の斎藤拙堂(1797~1865)に学んでいる。鼎の医学修学についても未詳であるが、『究理堂方府』『人身窮理学小解』『室篤満外科必読』『窠篤児薬性論』など赤木家に所蔵される蘭方の写本は概ね鼎によるものであるため、蘭方を学んでいたことは確かであろう。

以上、赤木家の江戸中期から近世後期、明治期にかかる五代にわたる人物の修学状況と各旧蔵書について概観してきたが、それらは各代の修学傾向により分野の相違が明白となった。大略、明和安永年間の六代簡、七代凌は尾池恭庵、薫陵への修学に派生して後藤良山、香川修徳関係の資料を蔵し、続く文化年間に遊学する八代立は京都で吉益流を修めたことから吉益関係はじめ『傷寒論』関係資料を蔵し、江戸後期から明治期の十代鼎になると蘭方資料との関わりが顕著であったと言えよう。それらの各特徴については蔵書の一端から窺測したものに過ぎず、今後さらに時代の趨勢などを交え詳査、追究していく。

(本発表は、文科省科研費助成・基盤研究(B)「近世後期の医学塾からみる漢蘭折衷医学の総合的研究」(研究代表者:町泉寿郎, 課題番号25282066)による研究成果の一部である。)